

庄内地区

もっと だいひょうてき せんごかいたくしゅうらく
最も代表的な戦後開拓集落

1 庄内地区の入植者

しょうわ ねん ろっかしよむら やまがたけんしょうないち ほうしゅつしんしゃ
昭和22年(1947)、六ヶ所村に山形県庄内地方出身者が
にゅうしよく せんぜん やまがたけん ぶんごうけいかく かいがいじゅう かいたく
入植。戦前、山形県の分郷計画により海外移住した開拓
ぎゆうたい ぐんじん せんごひ あ てきちょうさ けっか
義勇隊や軍人が、戦後引き上げてきて、適地調査の結果、
きゅうごりょうち いもがざきちく にゅうしよく ひとびと
旧御料地であった芋ヶ崎地区に入植された人々であった。



ふっこしだいちぼくそうち ふうりよくはつでんきぐん
吹越台地牧草地と風力発電機群

2 庄内地区の開拓の歴史

- 昭和22年(1947)5月 **入植準備**:野辺地営林署の許可を取り、1本が直径約15~20cmの黒松林の土地に先発隊25名入植。幕舎設営し、丸太小屋や道路を作り本体入植の準備を行う。8月に綿羊17頭を導入。
- 昭和23年(1948)春 **農協設立**:本体を迎え、計66名で庄内開拓団を結成し、9月に「庄内開拓農協」を設立。土地分配 4.3ha、採草地なし、薪炭林は組合所有。(5地区、67戸、165名)
- 昭和24年(1949)10月 **農地拡大**:自給自足を図りながら農地を拡大していく。農耕馬 7頭導入。簡易開墾 35ha、天地返し32ha、ジャガイモ 9.6ha、大豆 14ha、小豆 4ha、麦・トウモロコシ・ヒエ・アワ・ソバ・菜種、綿羊 13頭、ヤギ 35頭、豚 9頭、ウサギ 277羽、鶏 436羽。模範開拓団として農林大臣賞受賞。
- 昭和28年(1953) **冷害**:遅霜で皆無作。冷害補助金等を農具・家畜等購入に充てる。
- 昭和29年(1954) **酪農へ**:二年連続の凶作。9月の台風で被害が拡大する。北海道から乳牛を導入し、畑作から冷害に強い酪農経営に切り替える。
- 昭和30年(1955) 戸数 66戸、働く牛 43頭、乳牛 41頭、馬 43頭、ヤギ 40頭、綿羊 50頭、サイロ26基となる。
- 昭和31年(1956) **初出荷**:搾乳し、乙供の牛乳処理場へ出荷する。悪路に苦労する。
- 昭和32年(1957) 全戸に配電され、電灯が付く。
- 昭和34年(1959) **成功検査**:開墾成功検査が実施され、全戸合格する。
- 昭和35年(1960) **耕地化終了**:全戸に乳牛が導入され、畑作から牧草や飼料用作物の作付けに変わる。庄内地区の耕地化(504ha)終了。
- 昭和40年(1965)2月 **朝日農業賞を受賞**:農協中心に牧草・資料作物の集団栽培や共同作業が評価される。
- 昭和42年(1967) **大規模化へ**:組合は、第二次5か年計画を立て、酪農の大規模化、多頭化を目指した。農協直営の乳用雄牛肥育センター設立。トラクターセンターを設立。昭和55年解散。
- 昭和46年(1971) **吹越台地の草地造成開始**:637haを国営農用地開発事業として開発し、486haの草地を造成する。飼料生産利用組合設立。
- 昭和53年(1978) ~昭和62年(1987) **複合経営へ**:肉牛施設整備。翌年には、肥育センターを保育センターに変え、酪農と肉牛用の肥育を組み合わせた複合経営が可能となる。
- 昭和56年(1981)
- 昭和60年(1985) 牛乳生産量6,000トンを超える。近代的専業酪農地帯へと発展。



にゅうしよくとうじ じゅうきよ はっこうださん
入植当時の住居と八甲田山



ランプの生活



なたねが 菜種刈り



きょうりよく でんちゆう た
協力して電柱を立てる

庄内地区は、戦後開拓の成功した事例である。成功の理由として考えられるのは、次の通り。

- 1 戦後開拓の苦難の道を、佐藤繁作団長の元、一致団結して乗り越えてきたこと。
- 2 畑作経営の挫折を経験するが、その後一貫して酪農を営農の中心に置いた経営を行ったこと。
- 3 酪農経営の時代の変化に対応させながら、複合化(搾乳・搾乳と肥育・肥育経営)していったこと。



郷土館キャラクター
まがりん

かみいやさかちく 上弥栄地区

きんきゅうかいたく ちくりきかいこん ほんけん もっと すぐ ぎょうせき のこ しゅうらく
緊急開拓で、畜力開墾では本県で最も優れた業績を残した集落

かみいやさかちく にゅうしょくしゃ 1 上弥栄地区の入植者

せんご きゅうし いっしょう え きゅうまんしゅうおよ からふと ひ あ
戦後、九死に一生を得て旧満州及び樺太からの引き揚
げてきた人々で、「満州弥栄開拓団」と「上北郡」から
かみいやさか めいめい にゅうしょくとうじ ぞうきばやし ばっさい
「上弥栄」と命名している。入植当時は、雑木林で、伐採
かいこん なたね ばれいしょ だいず はたさく はじ
開墾して、菜種や馬鈴薯、大豆の畑作から始まった。

かみいやさかちく かいたく れきし 2 上弥栄地区の開拓の歴史

- 昭和22年(1947)5月 **3回にわたり入植**:山田岩次郎氏を代表として、適地調査を行い、先遣隊として33戸が入植。耕馬4頭導入。24年に34戸、26年に12戸が入植。総計74戸、人口362名となる。
本県最初の機械開墾地区:耕地面積419haの内、機械開墾は30ha、389haは畜力開墾で行い、本県で最も優れた業績を残した。
- 昭和26年(1951)秋 **焼失**:収穫物数百俵(総生産物の半分)を、有戸駅日通倉庫で原因不明の火災で焼失。保証されず。**模範開拓団として農林大臣賞受賞。**
- 昭和27年(1952) **一部水道**:一部水道工事を行うが、36年まで10年間、飲雑用水不足で苦しむ。
- 昭和28年(1953) **冷害**:遅霜で皆無作。
- 昭和29年(1954) **酪農へ**:二年連続の凶作。強い霜で大豆が半作。ジャージー種牛4頭を導入。
- 昭和31年(1956) **ホルスタイン種牛導入**:北海道から40頭、翌年も40頭導入。酪農研究会開催。
- 昭和36年(1961) **トラクター導入**:トラクター利用協同組合を設立。
- 昭和37年(1962) **テンサイ栽培**:換金作物として1戸当たり50aから100a栽培。10月フジ製糖青森工場落成。
- 昭和40年(1965) **離農者が相次ぐ**:10a当たり1万円(現在のお金としては約4.2万円)。当時としては、かなりの高額であった。
- 昭和41年(1966)4月 **入植20周年記念式典を行う**:「開拓」記念碑を建立。
- 昭和42年(1967)3月 **フジ製糖工場休業**:貿易の自由化による砂糖の市況が悪化し、工場を閉鎖する。(ビート栽培農家93戸、2,300ha)
- 昭和43年(1968) **用地買収**:三井不動産等六ヶ所村で土地を買い始める。44年空前の土地ブームが起こる。
- 昭和45年(1970) **頭数最高**:乳牛頭数最高で、成牛260頭・育成仔牛100頭となる。
- 昭和47年(1972) **用地買収第一号**:むつ小川原開発公社に用地買収の契約がなされる。10a当たり、田1等級76万円・畑1等級67万円・山林原野1等級57万円。
日本酪農青年研究発表会で**最優秀賞受賞者**が出る。(高橋氏、二階堂氏)
- 昭和48年(1973)4月 **27年の歴史を閉じる**:清算のため組合総会を開く。
- 昭和54年(1979) **むつ小川原国家石油備蓄基地の建設が始まる。**



かみいやさか いやさかだいらちく
上弥栄と弥栄平地区(右)

※国土地理院航空写真引用 S23



むつ小川原国家石油備蓄基地



かみいやさかかいたくのうきょうじむしょ
上弥栄開拓農協事務所



にゅうしょくとうじ
入植当時のメンバー 昭和23年



けいしゃち おお こうさくち しょうわ ねん
傾斜地が多い耕作地 昭和29年



ほうぼくふうけい しょうわ ねん
放牧風景 昭和47年

かみいやさかちく こ のうか やく わり あ こ りのう けっか はや らくのう てんかん
上弥栄地区は、79戸の農家のうち、約3割に当たる26戸が離農する結果となったが、いち早く酪農へ転換
し、優秀な酪農家を輩出する。畜力開墾で優れた業績を残し、他の地区の開墾を手伝う者も現れた。

- せんごかいたく けいかく ふび たん なんみんきゅうさい しつぎょうたいさくじぎょう いみ も
1 戦後開拓の計画そのものが不備であり、単に難民救済、失業対策事業という意味しか持っていなかった。
- かいたくのうか たい ぎょうせい らくのうしんこう しょうれい め へんか けいえい あんてい
2 開拓農家に対する行政も、酪農振興からてんさい奨励と目まぐるしく変化し、経営は安定しなかった。



郷土館キャラクター
まがりん

弥栄平地区

戦前の県営開拓：馬鈴薯の栽培適地として開墾を始める

1 弥栄平地区の入植者 (弥栄平:旧陸軍軍馬補充部牧草地の岡沼平)

- (1) 1897年(明治30年)、大野三郎氏(名古屋生まれ、札幌農科大学出身)が、岡沼平に入植開墾するが、20余年間で土地を去る。
- (2) 1936年(昭和11年)、若松菊蔵氏が調査、県営六ヶ所村集団農耕地として決定し、入植が始まる。



い や さ か だ い ら ち く
弥栄平地区(旧岡沼平)

※国土地理院航空写真引用 昭和23年

明治30年(1897)

開墾:大野三郎氏が、入植開墾する。

昭和11年(1936)

調査:金木修練農場指導員若松菊蔵氏が、弥栄平を調査する。

決定:県営六ヶ所村集団農耕地に決定。県営六ヶ所村集団農耕地開発事業事務所が設置される。10月開墾作業準備。11月馬耕開墾を始める。入植者32名、1戸当たりの経営規模は約4ha。

昭和12年(1937)4月

本格的な開墾開始:馬6頭での3頭立て馬耕開墾。伐根作業は人力で行う。73町歩の畑を起こす。共同で、大豆、トウモロコシ、えん麦を作付け。10月に住宅、畜舎、共同作業場兼収納場兼集会場、共同家畜飼育場完成。11月に地鎮祭を行う。弥栄平と命名。

昭和13年(1938)

作付け:(1戸当たり) 大豆1~1.5町歩(収量3~2俵/反)、馬鈴薯1~1.5町歩(収量45~35俵/反)、小豆0.7~0.8町歩(収量2俵/反)

昭和14年(1939)

1次開墾完了:1戸当たり耕地4.5町歩、馬1頭、鶏100羽、豚4頭を飼育できる畜舎所有。

昭和15年(1940)

開校:11月31日戸鎖小学校弥栄平分室開校(冬期間)

昭和17年(1942)

払い下げ:岡沼周辺地30町歩は湿地のため畑作できず。集落南方隣地村有地30町歩を1反30円で払い下げを受け、団員に分割する。

昭和21年(1946)

品評会:若松菊蔵氏、2歳馬品評会で4頭受賞。

昭和22年(1947)

農林水産省上北馬鈴薯原原種農場ができる。

昭和24年(1949)

組合設立:弥栄平種馬鈴薯採取組合、弥栄平農産組合を組織。組合長福岡由太郎氏就任。

昭和25年(1950)

開校:弥栄平小学校開校(~S50)、20万円かけて校舎増改築。

式典:部落建設創業15周年記念式典挙行。沿革史作成。

昭和28年(1953)

学校:初めての学芸会と運動会を開催。仔牛の肥育が盛んになる。1頭7,000円~12,000円(約14万~約24万円)で売れる。

昭和29年(1954)

開校:室ノ久保中学校弥栄平分校開校(~S44)。10月10日強霜被害。

乳牛導入:ジャージー牛を導入※1頭8万円(約160万円)、1戸当たり2、3頭

昭和31年(1956)

開田:計画立案、翌年20町歩開田、33年33.7町歩開田。

昭和48年(1973)

県開発公社が土地買収を始める。

昭和54年(1979)10月

弥栄平閉村式開催。



じゅうきよ おかぬま こうくうしゃしん
住居と岡沼の航空写真



のうりんすいさんしゅうばれいしよげんげんしゆのうじょう
農林水産省馬鈴薯原原種農場



しょうわ ねん かみいやさかしょうがっこう どうごう
昭和37年 上弥栄小学校に統合



へいせい ねん いやさかだいらちく こうくうしゃしん
平成20年 弥栄平地区航空写真

弥栄平地区は、1936年に県内5カ所の東北地方集団農耕地開発事業(~S15)によって開拓が始められた。補助額は国・県が5割程度であったが、入植後、戦争により農産物価格が有利となり、戦後のインフレで負債の整理が容易になったことで、比較的短期間で安定農家となった。昭和22年農林省馬鈴薯原原種農場誘致とともに、周辺地区を一大馬鈴薯生産地として定着させた業績を残す。むつ小川原開発のため、解散・移転した。



郷土館キャラクター
まがりん

ちとせちく 千歳地区

きゅうりくぐんぐんぼほじゅうぶほうぼくじょう かんしゅじょ きゅうしゃ 旧陸軍軍馬補充部放牧場と監守所・厩舎



ちとせちく 1 千歳地区の開拓

ちとせ とよせ むつさかえ とよはら めのこしちくやく ヘクタール
千歳・豊瀬・睦栄・豊原・目ノ越地区約5,000haが
ぐんばほじゅうぶ ほうぼくじょう げんざい きゅうちとせちゅうがっこうしゅうへん
軍馬補充部の放牧場で、現在の旧千歳中学校周辺に
かんしゃ きゅうしゃ ばたけ はいせんご おおくらしゅう
官舎・厩舎・ジャガイモ畑があった。敗戦後、大蔵省
かんざいきよく かんりか お
管財局の管理下に置かれていた。

- (1) くらうちくぐんぼほうぼくじょう かんしゅじょ せつりつ
倉内酪農開拓協会(徳川義親氏、高田道信氏、太田正治氏)が設立
(昭和21年4月)されたが、10月に解散。
- (2) ろっかしよむら にゅうしよくしゃ ぼしゅう そんない
六ヶ所村が入植者を募集(昭和21年4月)。村内から10
かぞく めい にゅうしよく かんしゃ きゅうしゃ じゅうたく りょう
家族、28名が入植。官舎・厩舎を住宅に利用、
おも しゅうにゅう すみや
主な収入は炭焼きであった。(1窯40俵で米60kg分の収入)
かみきたちょう とよせ めい にゅうしよく
上北町からは、豊瀬に8名が入植する。



くらうちくぐんぼほうぼくじょう かんしゅじょ
倉内軍馬放牧場と監守所 大正6年(1917)



ちとせ しょうない ちく
千歳と庄内3地区(南側) 昭和23年(1948)

ちとせちく かいたく れきし 2 千歳地区の開拓の歴史

- 昭和21年(1946)4月 倉内酪農開拓協会:4月設立され、トラクター11台で開墾されたが、入植者・開発営団・開拓協会と折り合いがつかず10月解散。
// 入植募集:六ヶ所村と上北町が入居者募集。村内から28名、上北町から豊瀬に8名入植する。11月土地分配(1戸当たり農地用8ha、山林2~3ha、8年間で開墾完了予定)
- 昭和22年(1947)4月 千歳開拓農業協同組合設立:開拓資金導入開始。住宅20棟完成。
昭和23年(1948) 開墾開始:9月開田用地払い下げ、10月倉内地区開拓農業協同組合設立。集落に馬1頭配分。11月開拓作業開始。10a 当たり夫婦2人で10日以上、1伐根作業は3時間以上要した。
- 昭和24年(1949) 畑作:馬鈴薯・菜種・大豆・小豆・粟・ヒエ・えん麦・ソバの栽培始める。
昭和25年(1950) 豊原地区:樺太からの引揚者中心に18戸入植。
昭和29年(1954) 酪農へ:二年連続の凶作。豊瀬地区で乳牛4頭導入する。
昭和33年(1958) 全戸導入:豊原地区の全戸に乳牛が導入される。
昭和34年(1959) 北部上北機械開墾入植:睦栄・豊瀬に機械開墾農家48戸入植。
昭和40年(1965) 第1回千歳地区酪農祭開催:短角繁殖牛の飼育が始まる。
昭和47年(1972) むつ小川原開発市街地:千歳地区が決定される。
昭和49年(1974) 新市街地建設始まる:12月、新市街地起工式挙行。この頃の千歳地区の酪農・畜産家数は、23%減少する。

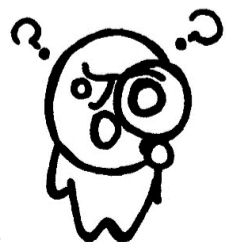


ちとせしんしがいち じゅうく
千歳新市街地A 住区 平成20年(2008)



むつさかえ ちく ぼくそうち ふうりょくはつでんき
睦栄地区牧草地と風力発電機

ちとせかいたくちく りっちじょうけん きしやうじょうけん めぐ せんご ねんかん しよくりょうなん しきんなん けんせつじぎょう
千歳開拓地区は立地条件や気象条件に恵まれず、戦後10年間は食糧難と資金難で、建設事業は
そうぞう こく ぐなん れんぞく せいたんぎょう はじ はたさくけいせい おこな れいがい みま らくのう
想像を超える苦難の連続だった。製炭業から始まり、畑作経営を行うが冷害に見舞われ、酪農を
めざ しょうわ ねん きかいがいこん おこな しょうわ ねんいこう おがわらかいはつ らくのうか
目指す。昭和34年から機械開墾も行われるが、昭和46年以降のむつ小川原開発により、酪農家が
げんしょう かいはつ せんび がい のうか い のこ けいせい きぼ かくだい はか
減少。開発の線引き外となった農家は、生き残りをかけて経営規模の拡大を図っていった。



郷土館キャラクター
まがりん

こくえいほくぶかみきたきかいかいこんじぎょう 国営北部上北機械開墾事業

くにせかいぎんこう しきんえんじょ じぎょうちやくしゅ
国と世界銀行からの資金援助によって事業着手

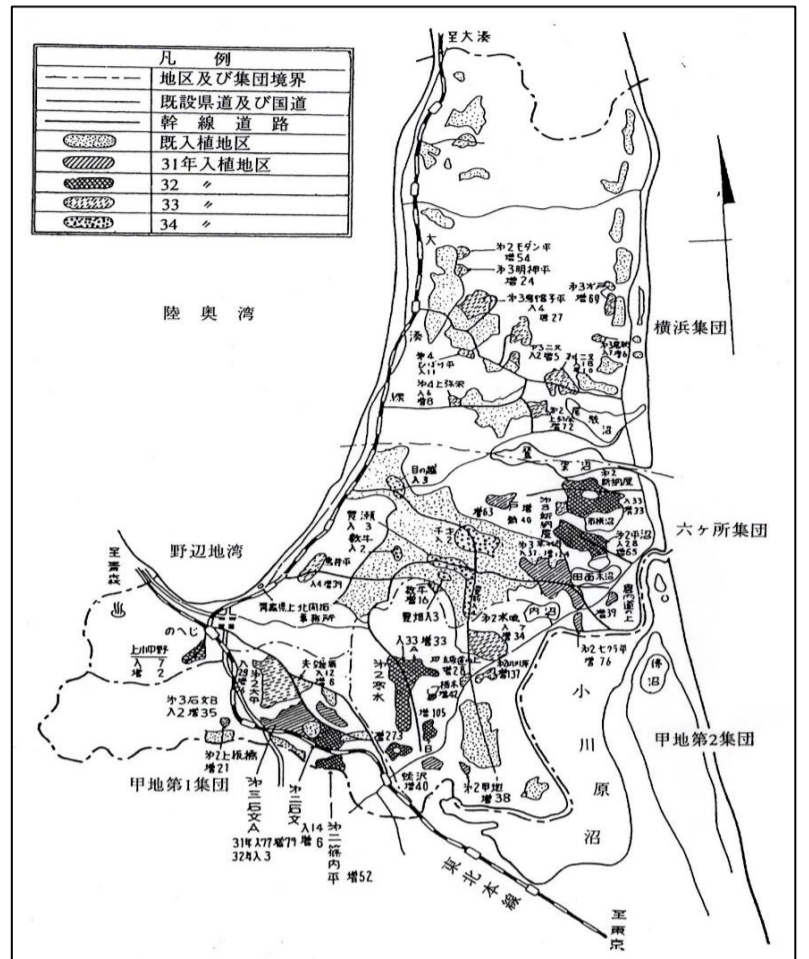
ほくぶかみきたちいき かいたく 1 北部上北地域の開拓

くにせかいぎんこう みかいはつちいき ほくぶかみきたちいき
国と世界銀行は、未開発地域として北部上北地域
(野辺地町・甲地村・六ヶ所村・横浜町、後に倉内地区
の参加)の基本調査の結果、資金援助が決定され
事業が着手された。戦後開拓のモデルケースと位置
づけされた。

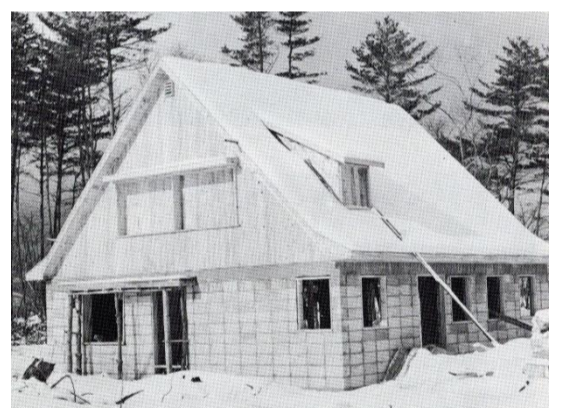
- (1) 機械開墾による農地の造成
- (2) 家畜・農機具の導入、農業用施設の建設に大きな資金を投入し、早期の営農の安定を図った。

こくえいほくぶかみきたきかいかいこん れきし 2 国営北部上北機械開墾の歴史

- 昭和27年(1952) **国の調査**: 未開発地域として基本調査を2年間実施する。
// **世界銀行**: 農業未利用地効率用調査の結果資金援助決定。
- 昭和31年(1956) **北部上北開拓酪農農業協同組合設立**
(主な事業概要) 農地開発機構公団により、抜根・荒起こし・土壌改良・整地・一部の播種をすべて機械力で、短期間で完成させる。乳牛の飼養を主とした混合農業を採用。開墾と入植増反計画として、実施期間は5か年と設定。六ヶ所工区は、戸鎖・第二新納屋・第二平沼・倉内道の上・第三芋ヶ崎・第二七鞍平・第二八森・第四七鞍平・鳥井平(野辺地町)の9カ所が設定され、入植戸数102戸と増反戸数548戸耕作面積は942.77haとなった。1戸当たり5ha、乳牛4~5頭、耕馬1頭、豚4頭、鶏20羽、住宅・畜舎・サイロ・収納舎・堆肥盤、収支見込約15,789円(約50万円)
- 昭和38年(1963) **牛乳生産額、1億円突破。幹線・支線道路等の建設工事完了**
- 昭和39年(1964) **付帯工事完了**: 用水路・排水路等整備等施工。質の高い道路網完成。
- 昭和42年(1967) **運営資金**: 開拓資金の償還履行延期。
- 昭和44年(1969) **多頭化進む**: 資金の条件緩和措置により累積延滞金が整理解消される。乳牛の多頭化が進む。
- 昭和46年(1971) **大型化**: 生乳販売1万トンを達成。ハーバスター・トラクター・コンバイン等大型農機具導入。※52年農畜産物輸入増で、経営圧迫
- 昭和53年(1978) 加工原料乳保証価格が据え置かれる(5年間)。
- 昭和54年(1979) **生産調整**: 2万トン達成するも、初の生産調整始まる。※55年冷害・長雨で減収
- 昭和57年(1982) **乳価闘争**: 参加する。(~60年)
- 平成2年(1990) ブラジル農業研修生受け入れ(2年間)、酪農ヘルパー利用組合設立。
- 平成7年(1995) **受賞**: 村居金三郎氏が内閣総理大臣賞と日本農業パイオニア賞受賞。生乳生産額約22億6千万円の一酪農地帯となる。



かみきたちくがいようず
図1 上北地区概要図 「村史中巻」より転載



にゅうしょくとうじ じゅうきよけんちくしゃ
入植当時の住居兼畜舎



にゅうしょくとうじ うま しゅうそうばんばん
入植当時の馬による集草運搬



げんざい つみこみうんぱん
現在のローダーによる積込運搬

かいこんとうしょ こうちめんせき けいかく したまわ とちかいらいよう こうか しゅうにゅうげん なたね だいずとう ていせいさん
開墾当初の耕地面積は、計画を下回り、土地改良も効果なし。収入源の菜種・大豆等は、低生産・
ふあんてい かかく はんばいたいせい ふび さくつけめんせき げきげん どうにゅうご せいとうしゃひきあげ しょうわ ねん
不安定な価格・販売体制の不備から作付面積が激減。てんさい導入後のフジ製糖社引揚。昭和35年
には乳価体系の変更によるジャージー種牛からホルスタイン種牛に変更等で、借入額が増大する。
にゅうかたいけい へんこう しゅぎゅう へんこうなど かりいれがく ぞうだい
農畜産物の輸入増や牛乳の消費量低下等、苦難の連続だったが、良質生乳の生産供給、酪農
けいはい きかいか にゅうにくふくごう すいしん けいはいきほ かくだい いちだいらくのうちたい あ
経営の機械化、乳肉複合の推進、経営規模の拡大により、一酪農地帯をつくり上げる。

